

## 第22回国際動物行動学会議に参加して

(湘南工科大学附属高等学校) 苗川博史

### 1. はじめに

第22回国際動物行動学会議(International Ethological Conference, 略称 I E C)が1991年8月22日から29日まで京都の大谷大学で開催された。

全期間参加し、研究上のみならず国際化を考える上で新たな刺激が得られた。

以下、内容と所感を述べてみたい。

### 2. 会議の目的と性格

動物の行動学は約50年前、K. ローレンツ、N. ティンバーゲン、K. フォン・フリッシュ(いずれも1973年にその業績によってノーベル賞受賞)により創設された生物学の比較的新しい一分野である。動物行動学の内容は、一口にいえば、人間を含めた動物の行動の生物学的研究である。その行動がどうしておこるか、その行動はその動物の生存や繁殖にどのように役だっているか、巧みな行動はどのように進化してきたか、個体の成長につれて行動はどのように発達していくか、などの研究を柱としている。今日ではこれらの研究の進展に伴って、神経行動学、行動生態学、進化生態学、社会生物学、応用行動学、人間行動学等の分野を生み、かつ包含する大きな学問分野として、動物たちの世界の論理を解明し、自然保護や地球環境の問題に重要な示唆を与えている。この研究から生まれた見解(生物は種族保存のためではなく、個々の個体が自分の遺伝子をできるだけ多く残そうとしている)は、生物学のみならず、人間観における従来の視点を覆す大きな転換をもたらした。

本国際会議は、動物行動学の研究者が一同に会して、広範な分野の最近の成果と動向を論じ、今後のパースペクティブを得ることを目的としている。各国の著名な研究者に加え、国内外の若年研究者の参加が多く、知的刺激にあふれた会議となった。

### 3. これまでの開催状況

この会議の第1回目は、1949年イギリスのエジン

バラで開かれ、近年では1981年イギリスオックスフォード(参加者400名、日本人10名)、1983年オーストラリアブリスベーン(同500名、同25名)、1985年フランストゥールーズ(同800名、同20名)、1987年アメリカ合衆国マジソン(同800名、同20名)とヨーロッパおよびヨーロッパ外で交互に開催されてきた。以前は参加者を最高400名に制限し、日本の割当は10名とされていたが、1982年日本動物行動学会が発足され、またぜひ出席したいという若年研究者たちの強い要望に応える形で、1983年から日本人参加者を含め上記制限は撤廃された。1989年オランダユトレヒト(同800名、同25名)に続いて、1991年アジアでは初めて、日本で開催された。

### 4. 参加者

登録リストで見ると、外国人約300名、国内から約350名の参加者となっているが、最終発表によると約40ヶ国から、計700名近くの参加者であったという。参加者には、動物学者の他、水・畜産など応用行動学関係者、人類学・心理学など人間行動学関係者、観察・測定・記録などの開発にかかわる工学関係者、動物写真家など広範な分野の人々が含まれている。

大学、研究所所属の人々がほとんどであったが、小・中・高校に所属している人々も私を含めて9名参加し、本会員の橋本高校田口正男先生ら橋本生研グループをはじめ6名が発表した。

### 5. 日程と内容

会議は1991年8月22日から29日までの8日間にわたって行われた。午前中は動物行動学の主要テーマについて招待講演者がその最新の動向をレビューするプレナリーセッションにあてられ、午後は個々の研究者の研究発表が、口頭、ポスター、ビデオ、フィルムなどの形式で行われ、いくつかのシンポジウムも計画された。

夕方以降は、テーマごとのラウンドテーブル、ピ

デオ発表、公開講演会と盛りだくさんであった。内容によっては、まる1日、朝9時すぎから夜8時すぎまで参加するなど、かなりハードなスケジュールの日もあった。しかも英語によるセッションなので、グッタリして宿にたどり着いたのを覚えている。

会議中のポスターセッションは国内参加者の発表が多く、その内容もすでに国内の学会で発表済みか、一部追加のものが多く、新たな内容のものは多くなかったように思う。また、国内同士の研究者が、ポスターは英文でありながら日本語で説明していることが多く目についた。結果として国内研究者が集まり、外国人研究者がその中に入りづらいうであった。国内の研究者にとって、真の“国際化”とはほど遠い感じがした。発表登録しながらのキャンセルもあり(事情はさまざまであろうが)、国際会議にしては、いささか拍子ぬけした感もまぬがれない。国内の著名な研究者の中にも、原稿の英文を読むだけといったスタイルで、英会話を聞いている分にはまだまだという気がした。私自身、4年前よりこの会議の準備のため、英会話学校に大枚をはたいて通い、何とか日常会話レベルまで達したにもかか

わらず、でてくるテクニカルタームや、独特の英文構造を、頭の中ですばやく切り替え理解することは、しんどいことであった。それでもなんとかついていけたのは今後の自信につながった。英会話は、技術ではなく“コミュニケーション”であるという事実も、交流を通して体得できた。伝えるべき内容あるいは文化というものさえあれば、ブロークンでも意思が通ずるということも知った有意義な機会であったといえる。

## 6. おわりに

高等学校生物教科書で扱われている動物行動分野における種名やそれらの行動内容をみると、他分野と同様に用語の問題が内蔵されている。今後、動物行動学の新知見が生み出される一方で、少なくとも種ごとのエソグラム(行動目録)を整理しておかないと、用語はますます混乱を招くこと必至と思われる。国内においてもこれほど多くの動物行動の研究を志向する人々が増加しているわけであるから、この問題をせめて日本動物行動学会で検討する必要があるのではないかと大会を終えて感じた。

## 日本生物教育学会へのお誘い

本会は、日本生物教育学会の神奈川支部として活動しています。日本生物教育学会は、生物教育上のすべての問題をあつかい、会員の研究成果を発表する場を設けています。具体的には研究発表会・研究会・雑誌の発行などです。神奈川県生物教育研究会会員の皆様のご入会をご案内申し上げます。入会希望者は、事務局(会計)まで住所・氏名・勤務先を明記の上、年会費4,000円をお送り下さい。

学会事務局(会計) 〒180 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-10-13 成蹊高等学校生物学教室  
☎0422-51-5181(内線332) 郵便振替口座(日本生物教育学会) 東京0-8588